**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第３回　（２０１４年７月１５日）**

**・第３回の勉強範囲：「第二版の出版のことばと序文」(9)頁**

・📖（読む）**シュリー・ラーマクリシュナの絶えざる神意識**

**スワーミー・サーラダーナンダ、スワーミー・シヴァーナンダ、Ｍを含めた直弟子は、シュリー・ラーマクリシュナの最大の特徴を「師の意識が一瞬たりとも神かられることのなかったこと」と答えている。**

（解説）

これはベルル・マト本部での出来事です。そこにシュリー・ラーマクリシュナのことを良く知る出家や在家の弟子たちがいたので、あるお坊さんが彼らに質問しました。「シュリー・ラーマクリシュナという方の人格の、最大の特徴はなんですか？」と。答えは、「**一秒も神から意識をそらさなかった**こと」

ふつうの人は、ときどき神様を思い出すだけ。その時間はとても少ないです。霊的な実践を進めれば、もう少し思い出すかもしれないが、けれどもときどき忘れます。

しかし悟った人の特徴はなんですか？　神様への意識、それが自然に出ています。というよりも、一秒たりとも神様のことを忘れることができない。悟った人の中には、神様とつながった状態がずっとある。話していても、笑っていても、怒っていても、仕事をしていても、いつも神様とつながっているのです。もちろんつながるための実践も必要ありません。

ふつうの我々を考えると、心は同時に二つの仕事を行うことができないようです。しかし悟ったひとは、どのようにして、さまざまなことをしながら、つねに神様に意識をとどめておけるのでしょうか？

　おもしろいたとえがあります。ひとつは『福音』の中の、**歯痛**の例。歯が痛くても、我々はさまざまな仕事をしています。しかしつねに歯は痛く、痛みの箇所に意識があります。そのように神様に意識をとどめておく。

もうひとつは、**運転**の例。車を運転しているとき、我々は何かを考えたり、音楽を聴いたりしているが、つねに事故をしないように注意をして運転し続けています。そのように。

　ある日のこと、信者（トゥリヤーナンダジと思われるとのこと）の心にふと、疑問が浮かびました。「食事のたびに、師にはたくさんの種類のカレーが運ばれるけれど、師はそれほど多くの量は召し上がらない。なのになぜ、ホーリー・マザーはそれを知っていて、このようにお食事を飾りたてるように出すのだろう？」

それを心で理解したラーマクリシュナは、「これがなかったら、私はおまえに教えることはできないのだ。ごちそうがあるから、心がふつうのレベルに降りてきて、私はおまえと話すことができるのだよ」と言いました。

ごちそうがなかったら、シュリー・ラーマクリシュナの心はいつも上にあがったまま、非二元論的レベル、ブラフマンとひとつのレベルにあがったまま、心はブラフマンにとどまったまま。ふつうのレベルに下がり信者たちに教えるために、ラーマクリシュナにはごちそうが必要だったのです。

これは慈悲です。慈悲の関係で、シュリー・ラーマクリシュナは食事に関してその習慣がありました。

ホーリー・マザーも同じです。スワーミージーの直弟子が証言しています、ホーリー・マザーの心はいつもブラフマンとひとつだったと。しかし参加者としゃべるときには、アーギャ・チャクラまで下がってきました。しかし、それから下には絶対に下がらなかった。

ホーリー・マザーに関して、ときどき間違った認識をききます。ホーリー・マザーは姪のラドゥにたくさん執着していたと。全然そうではないのです。我々の心のレベルは、お腹から下ですから。世俗的ですから。我々の心は、お腹から下へ動くか、下からお腹に上がるか、そこまでですから。ラーマクリシュナやホーリー・マザーの状態をわかりようがないのです。

シュリー・ラーマクリシュナの甥、ラムラルのこのような回想もあります。

沐浴の前にオイルで身体をマッサージしていると、つい、ラーマクリシュナの頭をさわってしまうことがあった。すると（頭頂の）サハスラーラをさわられるやいなや、すぐサマーディにはいってしまわれた。

このように神様についてのヒント（サハスラーラはブラフマンの場所）が少しでもあれば、ラーマクリシュナは即座にブラフマンのレベルに上がってしまわれたのです。だからラムラルは注意をうけていました、「頭をさわるときは、その前に必ず教えておくれ」と。でもそれを忘れてうっかりさわったことがあり、とっても叱られた。とっても怖かった。アヴァターラ（神様の化身）と一緒に住むのはとても難しいですね。もし不純な者がさわると、「あ！とっても痛い！」となる。ブラフマーナンダジは、ラーマクリシュナのところに行く前には、神様に深く祈っていたそうです。「純粋になれ、純粋になれ」と。純粋にならないと、ラーマクリシュナにさわることもできないですね。

ラーマクリシュナ、ホーリー・マザーだけでなく、スワーミージー、ブラフマーナンダジもいつもその状態──**神様とひとつにつながった状態**でした。

これは、ブラフマーナンダジがベルル・マトの僧院長だったときの話です。

書類に僧院長のサインが必要だったのですが、昨日お願いしても、今日お願いしても、答えは「明日、明日・・・」。しかし、今日こそはサインをもらわなければならないと決心した係がお願いすると、「わかった、わかった。ではペンを持ってきてくれ」とおっしゃった。しかし書くときになって、ブラフマーナンダジは、「私の名前のつづりかたはどうだったかな、私は自分の名前を忘れてしまった」と言ったのです。ブラフマーナンダジは、何日もふつうのレベルに下がることができなかった。だからサインを書けなかったのです。

これは『福音』の中のお話。

コルカタのある信者が、シュリー・ラーマクリシュナに、顕微鏡という機械を見せに持ってきた。

しかしラーマクリシュナは、小さなものを見るために、心を下げて、顕微鏡をのぞくことができませんでした。なぜならいつも、偉大なもの（神様、ブラフマン）を見ていますから。偉大なものから心を引きもどさなければ、小さいものは見ることができない。このような心の状態は、我々には信じられないです！　『福音』にはさまざまな例がありますが、ラーマクリシュナは冗談を言っていても、１秒も神から心を離していなかった。われわれはふつう、いつも離れた状態です。

・📖（つづきを読む）**ニルヴィカルパ（ニルヴィジャ）・サマーディやサヴィカルパ（サルヴィジャ）・サマーディについては、パタンジャリの『ヨーガ・スートラ』または『ヴェーダーンタ・サーラ』のような聖典や、ヴィシュヌ派の文献にあるマハーバーヴァに見られるだけである。**

（解説）

まず、サマーディの種類について説明をします。

パタンジャリがまとめた『**ヨーガ・スートラ**』には、サマーディに関するさまざまな記述がありますが、ここでは、**サルヴィジャ・サマーディ**と**ニルヴィジャ・サマーディ**を取り上げます。

また**ヴェーダーンタ哲学**では、サルヴィジャ・サマーディを**サヴィカルパ・サマーディ**、ニルヴィジャ・サマーディを**ニルヴィカルパ・サマーディ**といいます。

言い方が違いますが同じ意味です。

次に、**ニルヴィカルパとサヴィカルパの違い**です。

瞑想をするとき、そこには、①瞑想をする人②瞑想（という行為それ自体）③瞑想の対象（たとえばブラフマン）、の３つが存在しています。

サヴィカルパ・サマーディのとき、①瞑想者と③瞑想の対象は、とっても近くに来ていますが、完璧にひとつではない。ちょっとだけ違う。ラーマクリシュナがそれを教えるときに使った例に、ランタンの例がありましたね。ランタンの炎はガラスで囲まれています。すなわち炎と自分との間にはガラスがある。炎ととても近いが、透明なガラス一枚のへだたりがある。サヴィカルパ・サマーディはそのように、神様のとても近くにきているが、ガラス一枚の隔たりがある状態。

ニルヴィカルパ・サマーディはそれがない。ガラスがない。瞑想者と瞑想と瞑想の対象（①②③）がひとつになった状態。ブラフマンとひとつになった状態。

少し語句の説明を追加します。

サルヴィジャとニルヴィジャはヨーガの言葉。

サヴィカルパ、ニルヴィカルパはギャーナ、ヴェーダーンタの言葉。

さらに、**バーヴァ**、**マハーバーヴァ**があり、これは**バクティ・ヨーガ**の言葉です。

**マハーバーヴァ**はとてもとても高いレベルです。信者と神がひとつになる。それはとても特別です。普通の信者はバーヴァまで。神様のことをきいて、泣き、笑い、踊り、身の毛が立つ。これらがバーヴァの状態の例です。しかしマハーバーヴァ──神様と信者がひとつになった状態──は、身動きひとつもできません。

『福音』の中に、**バイヤダシャ**（Bhyadash）、**アルダバイヤダシャ**（Ardha-Bhyadash）、**アンタルダシャ**（Antardash）という３つの状態が出てきます。これらはバクティ・ヨーガを信仰する信者の状態です。

最初はバイヤダシャ。直訳すると「外の状態」という意味。この段階では、信者は歌もうたえる、踊りも踊れる。次に、もう少し中に入ると（アルダバイヤダシャの状態）、歌はうたえないが、踊りはできる。最後に本当に中まで入ると（アンタルダシャの状態）、もはや何もできない。動けない。突然踊れなくなる。突然食べることができなくなる。（👉次回、第４回の勉強会でより詳しく説明しているのでご参照ください）

当時のひとびとは、バクティ・ヨーガの聖典、ギャーナ・ヨーガの聖典、ヨーガの聖典で、この「最高の経験」を読んだことはあった。しかしその経験者を見たことは無かった。シュリー・ラーマクリシュナに会うまでは。ラーマクリシュナはその**「最高の経験」の経験者**でした。

・📖（つづきを読む）**生涯一度でもこうした最高の霊的経験に至るのは、霊性の進化をきわめた魂にとっても非常にまれなことで、懐疑主義と物質主義の近代にあって、シュリー・ラーマクリシュナが日にいくたびもサマーディとバーヴァを経験された事実が、こうして克明に記録されているのは、まさに驚くべきことだ。**

（解説）

ニルヴェイカルパ・サマーディの経験はとっても特別です。聖者はいっぱいいますけれども、ニルヴィカルパ・サマーディの経験がある聖者はとても少ないです。サヴィカルパ・サマーディの経験はあっても、ニルヴィカルパ・サマーディの経験がない聖者はたくさんいます。たとえば、（『福音』に出てくる）トター・プリーは一度だけでしたね。しかし、ラーマクリシュナは何回も！　いや、一日の内で何回も！！　このことからも理解できます、シュリー・ラーマクリシュナの霊性のレベルがどれほど高いものだったかを！

・📖（つづきを読む）**これはシュリー・ラーマクリシュナの霊性の、格別な高さを示すと同時に、世界のさまざまな聖典に記された神について、その真理を確証しているものだと言えよう。師の人生こそ、聖典に秘められた霊的境地と霊的経験を実証するものであった。**

（解説）

『福音』の中にあるラーマクリシュナのさまざまな状態は、高い霊的状態の実例です。そしてそれだけではなく、聖典に書かれてあったことは正しい、という実証（デモンストレーション）でもありました。現代は科学を信じる時代です、科学者を信じています。だから実験して結果を得ることができなければ、みなウソだと考えがちです。しかし、サマーディは実験して見ることはできない。研究所で実証することはできない。普通の論理で証明はできない。バガヴァッド・ギーター、ウパニシャッド、聖書などの聖典はそれゆえ、たわごとだ、と考える人が普通でした。

ラーマクリシュナは特別な学校や大学にはいきませんでした。

自分の経験によって、聖典がいうことは正しいことを実証しました。

最初に悟って、あとで聖典の知識を勉強し、両者を比較して、そして喜びました、私の経験はあたまがおかしいからではなかった、私の経験はすべて正しかったと。

ふつうの求道者は、最初に聖典の勉強、あとから実践。

ラーマクリシュナははじめに悟り、あとから聖典。

スワーミージーもはじめはシュリー・ラーマクリシュナの経験を、「あなたの心の問題によるものだ」と言っていましたね。ラーマクリシュナはマザー・カーリーのところに走っていって、ナレン（スワーミージー）がこんなふうに言っていますと訴えました。そうしたら、マザー・カーリーは、「あの若者の話は聞かないでください」と答えました。

そんなタクールのもとには、あとになって、たくさんの有名な学者も来るようになったのです。

ふつう、最初はお花、そのあとにくだもの。**ラーマクリシュナは最初にくだもの、あとで花**でした。

（『福音』勉強会第３回、以上）